

未熟児の出生とその後の發育

(第二報)

關東通信病院

上村 菊 朗

日本女子大学

加藤 翠

本研究は、昨年度十三回大会に発表したものの第二報として、対象児、調査内容を追加して、未熟児出生の疫学とその後の發育状態を追求したものである。

対象児は、昭和二十七年四月一日より三十四年三月三十一日までに、東京都内T病院及びK病院において出生した未熟児で、調査内容は、病院記録カード参照、調査用紙を送付しアンケート調査、個別知能検査、体力測定、身体測定などである。

アンケートを依頼した者は三三八名、回答を得た者は一五五名、四五・九%で、知能検査、体力測定、身体測定に参加したものは、七四名、調査用紙回答者の五一・四%であった。

調査結果は次の通りである。

(1) 対象未熟児の出生率は、八年間の平均でT病院一・三%、K病院七・七%で、不規則ながら年とともに減少の傾向を示していた。また、診療対象者の社会的背景に差異があると考えられる両親の未熟児出生率に差がみられたことは、社会的経済的因子と、未熟児出生率の間には、ある程度の関連性があると考えられることである。

(2) 対象未熟児の双胎出生頻度は一二・六%で、成熟児のそれにくらべ高率とみられた。

(3) 調査に応じた未熟児一五五例中、母体に妊娠中あるいは出産時に何らかの疫病異常を認めたものは九七例六二・六%であった。殊に妊娠中毒症が三一・〇%の高率に認められたことは、従来の報告同様であった。

(4) 新生児黄疸、生理的体重減少などの現象は生下時体重が少なくなるにつれその程度が重くなっている結果がみられた。

(5) 生衛時期に遅滞の傾向はみられなかった。

(6) 離乳開始、完了の時期は、一般児のそれよりやや遅れている傾向がみられた。

(7) 運動機能開始時期については、愛育会乳幼児精神発達検査のそれに比し、遅滞傾向は不明であった。

(8) 着衣や排便の躑などの、生活習慣の自立時期については、山下氏の標準に比し、遅滞傾向はみられなかった。

(9) 言語発達については、シュテルンの発達段階に比し、遅滞の傾向は不明である。

(10) 実測した身体測定値は、例数が少ないためこれによって未熟児の体位を判定することは困難と思うが、生後一年までのものについては東大小児科の標準値、それ以上の年齢は三十四年度厚生省値と比較したが、一般児との間の体位の開き、その特性傾向については明らか結果は得られなかった。

(11) 握力、走力、片足跳、立巾跳、タッピング、球投げの六項目について体力測定を行なった結果、一般児の測定結果に比し、走力、片足跳、立巾跳、タッピング、球投げなどにおいて、劣る結果がみられた。

(12) 対象児の知能検査は、二才以下については愛育会乳幼児精神発達検査を実施し、三才以上は田中びねーを実施した。今回の結果において、未熟出生と知能指数との間に明らか関係はみられなかつた。

たが、対象児のIQの分散は標準に比し大であった。

(10) 対象児のIQを八四以下(C)、八五～一一四(B)、一一五以上(A)、の三群に分けて、生下時体重、在胎期間、出産回数、母体の年令、妊娠中及び出産前後の疫病異常の有無などについて比較してみた。

その結果生下時体重二kg以下、在胎期間八カ月以下の未熟児の頻度は、C群で最高、ついでB群、A群の順序になっていた。しかし生下時体重二kg以下、または在胎期間八カ月未満でも知能指数正常またはそれ以上を示した者が多数みられていることから、未熟出産そのものは知能指数と直接の関係はないものと考えられ、未熟出産をもたらす或いは未熟児出産時に起りやすい異常がその後の発育に影響を及ぼす事が考えられる。

(大会抄録1—5頁)

幼児重症歯蝕症についての研究

日本体育短期大学 深田英朗

小児歯蝕症の発生は益々その激しさを加える傾向が見られ、特に低年令層における発生と、重症歯蝕症の傾向は著しい。特に低年令層における場合は、終局的には歯冠の完全なる崩壊を来し、咀嚼く、発音などの著しい障害を招くことは勿論、応々にして継歯根端病巣の形成を容易にし、発育中の永久歯歯芽へ種々なる障害を与え、永久歯の発育不全、歯列不正の遠因をつくる。一方これら根端病巣は時として歯牙病巣感染症の成立をうながし、成長発育期の小児の健康をおびやかすおそれもあり、小児科学上重要な意味を持つものと思われる。

(1) 重症歯蝕症の定義 乳歯二〇歯全部がムシバに侵され、しかもその罹患タイプは急性汎汎性のものである。

(2) 重症歯蝕症の発現頻度 東京都内の五才の幼稚園々児について調査した結果、次のような成績を得た。

調査人員は六七七名で男子三五八名、女子三一九名である。そして男子は三五八名中一五人の発現で四・一九%±一・〇五、女子は三一九名中一三名で四・〇七%±一・一〇であった。なお *Measles* は二、八四二人の小児のうち五%の発現状態であると報告しているが、対象となった年令が一四才と一七才である。また岩堀氏は *Measles* *Caries* を *Caries* の罹患型を無視し、乳歯列二〇歯全部が歯蝕であるという定義づけをして調査した結果、昭和二六年においては五才児は男〇・九四%±〇・二五、女一・〇〇%±〇・二七、また昭和三二年の成績では五才児において男一〇・九九%±二・三二、女一一・四一%±二・三四であると報告している。なお参考のために、私の調査した三才から六才までの五一〇名小児に発生した歯蝕の罹患型名を報告すると次の通りである。

単乳型三一・九六% 輪狀型一〇・三九% 広範型四七・四五% 慢性型〇・七六% 重症型五・一〇%(ムシバなし四・三一%)

(3) 重症歯蝕症小児の調査成績 調査対象は三五年四月より三六年四月までの日本大学小児歯科外来患者の重症歯蝕症のもの二〇名である(男子九名、女子一一名)。なお年令は次に示す通りである。

三才四名 四才四名 五才五名 六才五名 七才一名 八才〇才一名 九才一名

調査はこれら小児の既応症、食生活、発育状態について行なった。

(1) 既応症に関する調査 次の八項目について調査

(a) 生下時体重。これは平均二八五〇gで一応平均に近い。なお